

## 日本語教師が教師研修に求めるものは何か：大学日本語教育センターと日本語学校の日本語教師の比較から

池田， 広子  
目白大学外国語学部日本語・日本語教育学科：教授

酒井， 彩  
九州大学留学生センター：准教授

<https://doi.org/10.15017/4783534>

---

出版情報：九州大学留学生センター紀要. 27, pp.13-20, 2019-03. 九州大学留学生センター  
バージョン：  
権利関係：



# 日本語教師が教師研修に求めるものは何か

— 大学日本語教育センターと日本語学校の日本語教師の比較から —

## What do Japanese language teachers seek from teacher training?: Comparison of teachers from university Japanese language education centers and those from Japanese language schools

池田 広子\*

酒井 彩\*\*

〈要旨〉

The purpose of this study is to examine what Japanese language teachers seek from teacher training through comparison of teachers from university Japanese language education centers (11) and those from Japanese language schools (10). We investigated the difference using KJ Law (Kawakita 1970). The results indicated that in regard to the way teacher training is carried out, both university and Japanese language school teachers indicated the same three categories. However, in regard to the content of training, university teachers indicated more categories than their counterparts.

### 1. はじめに

近年、学習者だけでなく日本語教師も多様化し、日本語教師を取り巻く環境も複雑になってきている。例えば、地域の日本語教室、日本語学校、高等教育機関、さらには企業や福祉施設などで日本語教師は関わっており、世代も経験も国籍も実に多様である。そうした多様化する日本語教師を支える教師研修はどうあるべきだろうか。これまで文化庁による日本語教師養成・研修に関する調査(2012)で実態が明らかにされたが、日本語教師が研修に対して何を求

めているのかはほとんど追究されていない。本研究では、その第一歩として、大学の日本語教育センター非常勤講師(以下 大学非常勤講師)と日本語学校の非常勤教師(以下 日本語学校非常勤教師)に着目し、教育現場により教師研修に求めることがどう異なるかを探ることを目的とする。

### 2. 先行研究

2000年に文化庁から提示された「日本語教員のための教員養成について」(日本語教員の養

\* 目白大学外国語学部日本語・日本語教育学科教授

\*\* 九州大学留学生センター准教授

成に関する調査研究協力者会議2000)によると、日本語教育の根底を成すものはコミュニケーションであり、教育内容の基本であるというものだった。ここでは新たに示す教育内容の3領域、さらにその区分として5つの区分が設けられた。縫部他(2005)は、この新しい教育内容の適切性を検証し、改良するために日本語を学ぶ学習者側から望ましい教師像を明らかにすることが必要であると主張した。そして、国内・国外の学習者を対象とし、「優れた」教師の行動特性を示した。この調査は日本語教員養成の新しい教育内容を検証することが目的であった。日本語教師研修については、文化庁(2000)、縫部他(2005)において言及されていない。

次に、2012年文化庁の「日本語教員などの養成・研修に関する調査結果について」では、国内の日本語教育機関を対象に5つの調査が行われた。調査1では「日本語教育機関等における日本語教員等の現状について」、調査2では「日本語教育機関等が日本語教員等に求めるものについて」、調査3では「日本語教員等の養成・研修を実施している日本語教育機関等における日本語教員等の養成・研修に関するカリキュラム・シラバスの内容について」、調査4では「日本語教育機関等が所属する日本語教員等に対して実施している研修の内容について」、調査5では「日本語教員等が日本語教育機関等に求める研修の内容について」であった。調査5の中で多く見られた項目は、「言語と教育」を軸にした研修であった。具体的には、「技能別の日本語を教えるために必要な知識を学ぶことを目指す」、「小・中学校での日本語学習支援活動の実践力の向上とサポーター同士の情報交換を図るため、スキルアップ研修会を実施する」などがコメントとして記述されていた。この調査は小

さなボランティア団体と教育機関では教師研修を実施していないところもあり、その割合は全体で4割を占めているという指摘もあった。しかし、調査1～5は文化庁を中心にした大規模な実態把握調査であり、其々の目的の解明を目指したものである。実際に日本語教師の一人一人がどのような研修を具体的に望んでいるのかについて深く追究したものではない。

現在、国内の日本語教師研修においては、教育機関や主催者別に見ると6つに分類できる。(1)国際交流基金による海外日本語教師の短期・長期研修など海外派遣前研修、(2)文化庁主催「生活者としての外国人」のための日本語教育事業：地域日本語教育実践プログラム、(3)日本語教育学会主催の教師研修、(4)日本語教育学会主催の研究集会、(5)自主的な研究会、(6)大学、日本語学校、ボランティア団体による研修である。これら以外に関連分野と連携した研究会、研修会なども行われており、多様で多くの教師研修が展開されている。しかし、日本語教師側のニーズを一定の根拠にもとづいて明らかにし、デザインしたものとはいえず、ほとんどは教師教育者、運営側の視点でデザインされていると推測される。

以上を踏まえ、本稿では様々な教育現場に置かれた日本語教師が教師研修に対して何を求めているのかを明らかにする。その第一歩として、大学非常勤講師と日本語学校非常勤講師に着目し、教育現場により教師研修に求めることがどう異なるかを探ることを目的とする。

### 3. 研究方法

#### 3. 1. 調査対象者(研究協力者)

調査は大学非常勤講師11名(40～50代、日本語教師歴平均237.8カ月)、日本語学校非常勤講

師10名(20～50代、日本語教師歴平均54.9か月)を対象に行った。

### 3. 2. データの収集方法

其々の調査対象者に書面にて研究の目的について、承諾を得た上で、指示文「日本語講師研修に望む内容や形式は何ですか。思いついたことをどんなことでもいいので書いてください。」を提示し、自由記述してもらった。

### 3. 3. 分析方法

KJ法(川喜田, 1970)を援用し、教師研修の形式と内容に関する部分に着目し、見出しを作成した上で意味のまとまりごとに小カテゴリー、中カテゴリー、大カテゴリーに分類・整理した。

## 4. 結果と考察

分析結果を表1と表2に示す。

教師研修の形式については、大学非常勤講師、日本語学校非常勤講師ともに3つの大カテゴリー(「研修の対象」、「研修の運営方式」、「研修開催の設定」)に大別された。次に教師研修の内容について、大学非常勤講師では8つの大カテゴリー(「授業の教え方に関する研修」、「教材・教具に関する研修」、「日本語教師としてキャリアアップするための研修」、「授業以外の学習者対応の研修」、「学習者評価に関する研修」、「研究方法に関する研修」、「専門分野の理論と実践、知識に関する研修」、「実践のふり返り」)が確認された。一方、日本語学校非常勤講師では、大学非常勤講師と共通する5つの大カテゴリー(「授業の教え方に関する研修」、「教材・教具に関する研修」、「日本語教師としてキャリアアップするための研修」、「授業以外の学習者

対応の研修」、「学習者評価に関する研修」)が確認された。では、大学非常勤講師や日本語学校非常勤講師は教師研修で具体的にどのようなことを求めているのだろうか。以下では形式面と内容面に分けて其々を見ていく。

### 4. 1. 教師研修の形式面について

まず、大学非常勤講師が形式面で何を求めているのかについて分類した結果を示す。上述した通り3つの大カテゴリー(「研修の対象」、「研修の運営形式」、「研修開催の設定」)が包摂された。「研修の対象」では、「新人研修のスキルを指導するための研修」が求められていた。「研修の運営形式」では、「ワークショップ」、「グループ・ワーク・意見交換」、「レクチャー形式」、「講習会形式」、「授業見学」、「模擬授業」、「実践的研修」、「時間に束縛されない研修」という運営が求められていた。特に「グループ・ワーク・意見交換」(6件)、「ワークショップ」(4件)においては、全体に占める割合が多く、参加者教師との意見交換をしたり、参加者教師同士で、一緒に活動ができることが求められていた。また、「参加者の方(参加者教師)とインターアクションをしながら自分で気づけなかったことを発見し、満足度の高い研修を受けたい」という記述も見られた。「研修開催の設定」では、夏季・冬季の休暇の中で短期集中を受講したいという記述があった。また、場所については、自身が働いている職場の近くで開催できれば、参加しやすいという記述があった。大学非常勤講師は時期や場所について限定的なニーズがあることがわかる。

一方の日本語学校非常勤教師の結果について述べる。大カテゴリーに関しては、大学非常勤講師と同様であった。

まず、「研修の対象」に関しては、「新人教師

表1 大学非常勤講師の求める研修

&lt;形式&gt;

大	中	小	対象者
研修の対象 (1)	新人教師向け研修 (1)	新人教師のスキルを指導する研修	2
研修の運営形式 (20)	ワークショップ形式 (4)	スキル指導のワークショップ形式	2
		ワークショップ形式	5
		ワークショップ形式	6
		ワークショップ	7
	グループワーク・意見交換 (6)	プロジェクトワーク形式	6
		他の教師と共にできる形式	7
		グループワーク	7
		参加者教師との意見交換	10
		参加者同士で知り合う形式 (研修前)	10
	レクチャー形式 (3)	教師同士の意見交換	11
		レクチャー形式	4
		話を聞く参加形式	8
注目の先生の話聞く		11	
講演会形式 (2)		研究方法の講習会	1
授業見学 (2)	パソコンの講習会	4	
	実践授業の見学	9	
模擬授業 (1)	最新の有用な授業の見学	11	
実践的研修 (1)	模擬授業	5	
時間に束縛されない研修 (1)	実践的な研修	5	
研修の開催の設定 (2)	集中研修 (1)	時間を取ってじっくり学べる研修	11
	開催の場所 (1)	短期集中コース	3
		職場の近くでの開催	3

&lt;内容&gt;

授業の教え方に関する研修 (7)	授業運営テクニックの習得 (2)	新しいテクニック	1
		タスクにおいて1対1の指導	4
	技能別クラスの教え方 (5)	技能別・レベル別教室活動で役立つ方法	3
		文法・技能別に分けた教え方	5
日本事情の扱い方		7	
プレゼンの指導の仕方		8	
教材・教具に関する研修 (5)	授業で使用する機材・教材の扱い方 (5)	文章やスピーチの指導方法	8
		教材作成のための PC 講習会	4
		新ソフトや教育機器を活用	5
		生教材と使った教え方	7
		初級学生への教科書の扱い	7
日本語教師としてキャリアアップするための研修 (4)	他者との交流による学び (1)	教科書の扱い方と確認	7
		人のつながり	10
		最近の情報・動向 (3)	情報や最近の動向の情報
授業以外の学習者対応の研修 (3)	障害をもつ学習者の知識・情報の獲得 (3)	各国の大学における日本語教育の現状	3
		一般教養	6
		発達障害などの学生への対応	7
		LGBT 学生への対応と取り組み	7
学習者評価に関する研修 (2)	評価方法 (2)	LD 対応と LGBT などの情報共有	9
		口頭表現の評価方法	1
研究方法に関する研修 (4)	研究方法 (4)	評価法	3
		統計についての研修	1
専門分野の理論と実践、知識に関する研修 (18)	専門分野の理論と実践、知識 (18)	PAC 分析についての研修	1
		クラスター分析の研修	1
		統計のレクチャ	4
		アクティブ・ラーニングの理論と実践	3
		コンテンツ・ベースドインストラクションの理論と実践	3
		専門領域以外の新しい理論	4
		専門性を深める研修	5
		自律学習について	6
		ティーチングポートフォリオについて	6
		ルーブリック評価について	6
		生涯学習について	6
		教師間について	6
		コーディングについて	6
		表現学習について	6
		情報リテラシーについて	6
		自律学習における動機について	8
		理論に結びつく話し合い	10
		各領域の先生方の最近の研究テーマ	4
新しい学問のトレンド	5		
最近の知見を学ぶ	10		
実践のふり返りに関する研修 (3)	実践のふり返りと改善 (1)	今更いけない学び直しの時間	11
		自分の授業のふり返りと改善	5
	ふり返り (1)	ふり返りの時間があること	10
	授業を客観的に考える (1)	自分の授業を客観的に考える	11

表2 日本語学校非常勤講師の求める研修

&lt;形式&gt;

大	中	小	対象者
研修の対象 (4)	新人教師向け研修 (2)	新人教師の研修	4
		新人教師同士が繋がる研修	3
	実際の学習者を想定した形式 (2)	教案作成の際の詳細な場面設定	10
		実際に教えている日本語学校の学習者を想定した研修	1
研修の運営形式 (4)	少人数個別形式 (1)	少人数で個別の評価がもらえる形式	8
	講義・ワークショップ形式 (1)	講義とワークショップ併用	10
	事例検討形式 (1)	具体的な事例から学ぶ形式	1
	意見交換形式 (1)	議論、意見交換形式	5
研修の開催の設定 (2)	定期的研修 (2)	定期的研修	3
		定期的研修	4

&lt;内容&gt;

授業の教え方に関する研修 (19)	授業運営テクニックの習得 (6)	日本語学習が楽しいと思える授業運営の方法	7
		教授法の習得と実践	8
		クラス運営の方法	10
		クラス運営方法	5
		レベル差のある会話クラスの進め方	9
		文系提出順序の方法	5
	技能別クラスの教え方 (4)	日本語試験対策の進め方	4
		初級漢字クラスの教え方	9
		中級会話クラスの指導の仕方	9
		ディスカッション・ディベートの指導の仕方	9
	教案作成と実習の機会 (3)	教案作成	7
		簡略化した教案作成・発表	3
		実践的な教案作成・発表	8
	先輩教師の授業見学の機会 (4)	様々な教授法を用いた授業の見学	7
		先輩教師の授業の進め方の体験	10
先輩教師の授業見学		8	
先輩教師の教案指導・学び (2)	先輩教師の教案の共有	7	
	先輩教師による教案のチュータリング	8	
教材・教具に関する研修 (7)	授業で使用する機材・教材の扱い方 (4)	授業で使用する機器の扱い方	5
		ワークシートの作成方法	6
		授業に必要な情報の入手の仕方	6
		簡単なイラストの描き方	5
	教科書の扱い方 (3)	新しい教科書の扱い方	4
		教科書の扱い方	5
		実際に使用している教科書の扱い方	7
日本語教師としてキャリアアップするための研修 (7)	他者との交流による学び (3)	幅広い分野の研究者や専門家を招いた研修	2
		他校の日本語教師との交換研修	6
		海外就職経験のある日本語教師の講演	6
	日本語教師としてのキャリアに関する情報 (2)	資格取得などスキル・資格情報	6
	日本語教師の働き方の情報	6	
日本・世界に関する知識・情報 (1)	日本や世界の情勢、時事、文化、言語、考え方の知識習得	6	
教師としてのマナー情報 (1)	教師としての授業中の振る舞い方	6	
授業以外の学習者対応の研修 (5)	学習者の文化背景に関する知識・情報の獲得 (2)	多国籍の学習者の文化背景が理解できる情報	6
		多国籍の学習者の文化背景の理解のための先輩教師の経験の共有	8
	トラブルへの対処方法 (2)	トラブル対応方法	6
	問題対処と学術的根拠の学習	1	
	受験指導対応方法 (1)	受験指導対応方法	4
学習者評価に関する研修 (1)	評価方法 (1)	作文、会話の評価方法	9

向け研修」と「実際の学習者を想定した形式」が求められていた。これは日本語学校では日本語学習者増加に伴い、常に新しい非常勤講師が入ることから、新人に対する教師教育と実際の現場で即戦力として働ける人材が必要とされていることが背景にあるものと考えられる。

次に、「研修の運営形式」では、大学非常勤教師同様に「少人数個別形式」、「事例検討形式」など多様な形式が望まれていた。これは多くの教師と意見交換をし、授業を改善していきたいという意欲の表れだと推察される。

また、「研修開催の設定」では「定期的研修」のみが求められていた。これは大学と違い、長期的な休みのない日本語学校の特徴であると考えられる。

#### 4. 2. 教師研修の内容面について

4. 2. では両教師が内容面で何を求めているかについて分類した結果を示す。上述した通り、大学非常勤講師は、8つの大カテゴリー（「授業の教え方に関する研修」「教材・教具に関する研修」「日本語教師としてキャリアアップするための研修」「授業以外の学習者対応の研修」「学習者評価に関する研修」「研究方法に関する研修」「専門分野の理論と実践」「知識に関する研修」「実践のふり返りに関する研修」が包摂された。第一に、「授業の教え方に関する研修」は、中カテゴリー「授業運営テクニックの習得」と「技能別クラスの教え方」から生成された。「授業運営テクニックの習得」では、全般的な指導と一对一のタスクの指導方法に関するものや新しい教え方のテクニックを求めるものが見られた。「技能別クラスの教え方」では、『みんなの日本語』など、教科書で教える文法の確認を求めるものや「文章やスピーチをする時に相手にわかりやすい論理的なアウトプットが

できるような指導方法」「プレゼンをうまくまとめられるように学生に指導できるような方法」等が見られた。このような記述から「授業の教え方に関する研修」では、いわゆるハウツーを求めており、新しい教え方やハウツーの図書が発行されていない教え方について教師研修で補うことを求めていることが推測された。

第二に、「教材・教具に関する研修」は、「授業で使用する機材・教材の使い方」から生成された。具体的には、教材作成のためのPCのリテラシー講習会をもとめるものや、新ソフトや教育機器を活用することを求めるものや初級、上級の学習者について教科書以外の生教材を使った教え方の共有を求めるものなどが見られた。

第三に、「日本語教師としてキャリアアップするための研修」は、「他者との交流による学び」と「最近の情報・動向」から生成された。「他者との交流による学び」では、人のつながりを学ぶようなものが見られた。また、「最近の情報・動向」では、「新しい学問のトレンドを知る機会が有ればありがたい」というコメントや「最新の知見を学びたい」、「各国の日本語教育の現状を知りたい」「一般教養を学びたい」等というものが見られた。

第四に、「授業以外の学習者対応の研修」は、「障害を持つ学習者の知識・情報の獲得」から生成された。具体的には、「発達障害などの学生への対応と取り組みを共有したい」や「LGBT学生への対応と取り組みを知りたい」などが見られた。この結果は、現在の大学教育全体で求められる「しょうがいのある学生への対応」と連動しているものだと考える。

第五に、「学習者評価に関する研修」は、「評価方法」から生成された。具体的には、口頭表現の評価方法や評価法を求めるものや評価法そ

のものを求めるものが見られた。

第六に、「研究方法に関する研修」は、具体的には統計についてのレクチャーを受けたいというものやクラスター分析、PAC分析の講習を学びたいというものが見られた。ここでは、研究方法に対する具体的なニーズがあり、これに対する意識が高いことが窺える。

第七に、「専門分野の理論と実践、知識に関する研修」は、大カテゴリーのなかで最も多くの件数が見られた(18件)。ここでは、アクティブラーニングの理論と実践、コンテンツ・ベーストインスタラクションの理論と実践、専門領域以外の新しい理論、専門性を深める研修、新学問を求めるものが見られた。ある調査協力者はこの項目について積極的に記述しており、自律学習における動機、ティーチングポートフォリオ、ルーブリック評価、生涯学習、教師間の学び、コーティング、表現学習、情報リテラシーなどを求めている。

第八に、「実践のふり返りに関する研修」は、「授業のふり返しと改善」、「ふり返し」「授業を客観的に考える」から生成された。具体的には、「自分の授業を客観的に考える時間があるとうれしい」や「人のつながりや研修会に会うという事実が重要」、「自分の授業を振り返ったり、改善することに繋がる研修がほしい」「ふり返りの時間が充分にあり、理論に結びつく話ができる」とい等が見られた。以上、内容面をみると大学非常勤講師は専門的な理論と実践及び研究方法に対して向学心があることが窺えた。

一方、日本語学校非常勤講師においては、5つの大カテゴリー（「授業の教え方に関する研修」「教材・教具に関する研修」「日本語教師としてキャリアアップするための研修」「授業以外の学習者対応の研修」「学習者評価に関する研修」）が見られた。

第一に、「授業の教え方に関する研修」では、「授業運営テクニックの習得」「技能別クラスの教え方」という授業の仕方に直結するもの、「先輩教師の授業見学の機会」「先輩教師の教案指導・学び」という経験のある先輩教師の教え方を習得するもの、「教案作成と実習の機会」があった。これは日本語学校の非常勤教師の主業務がティーチングであることに由来すると思われる。つまり、研修で教え方を学び、自らの授業をより良いものにしていきたいという意欲の表れと言えるのではないだろうか。

第二に、「教材・教具に関する研修」では、「授業で使用する機材・教材の扱い方」「教科書の扱い方」が見られた。大学非常勤教師がITリテラシーに注目する一方、日本語学校非常勤教師は教科書の扱い方やワークシートの作成法を求めているのは日本語学校の教師の教歴が大学非常勤教師に比べ、浅いことやプロジェクターなどの設備が整っていない施設があること、比較的若い世代でITリテラシーが高いことが理由として考えられる。

第三に、「日本語教師としてキャリアアップするための研修」では、「他者との交流による学び」「日本語教師としてのキャリアに関する情報」「日本・世界に関する知識・情報」「教師としてのマナー情報」があった。研究者や他校の日本語教師など通常関わりのない他者との交流や教師としていかに振舞うべきか省察したいという考えが見られた。これは日本語学校という比較的閉鎖的な空間に留まらず、常に向上していききたいという考えの表れではないだろうか。

第四に、「授業以外の学習者対応の研修」では、「学習者の文化背景に関する知識・情報の獲得」「トラブルへの対処方法」「受験指導対応方法」が見られた。学習者の多様化に伴い、問題の種類も多様になっている日本語学校におい

てその対応は喫緊の課題でありそのような研修が望まれている可能性がある。

第五に、「学習者評価に関する研修」では、「評価方法」があった。これは文法のように点数化できる評価と違い、作文、会話など教師個人の考えが反映される評価法に関する研修を望むものであった。

## 5. まとめ

本稿では、異なる教育現場に置かれた日本語教師が研修に対して何を求めているのかを明らかにするために、大学非常勤講師および日本語学校非常勤教師を対象に KJ 法を援用し、研修の形式と内容に着目して追究した。その結果、形式面においては両者共に「研修の対象」、「研修の運営方式」、「研修開催の設定」が挙げられており、その内容も共通している点が多かった。また、内容面では両者共に「授業の教え方に関する研修」「教材・教具に関する研修」「日本語教師としてキャリアアップするための研修」「授業以外の学習者対応の研修」「学習者評価に関する研修」を挙げていた。しかし、大学非常勤教師においては、「研究方法に関する研修」、「専門分野の理論と実践、知識に関する研修」、「実践のふり返り」といった内容も確認さ

れ、専門的な理論と実践及び研究に関心が高いことが窺えた。一方、授業の実施が主業務である日本語学校非常勤講師では、授業で教えることが密接であるため、「授業の教え方に関する研修」が多く見られた。

今回の調査結果は、個人の教授経験や教授歴などを考慮しておらず、異なる教育現場の日本語教師の意識を探ったものである。本調査の結果を一般化していくためには、さらに精査した調査と調査対象者を増加することが必要である。今後の課題としたい。

## 参考文献

- 足立祐子 (2012) 「日本語教員等の養成に関する一考察」『新潟大学国際センター紀要』8, 1-10
- 川喜田二郎 (1970) 『続・発想法 — KJ 法の展開と応用』中公新書
- 縫部義憲・渡辺倫子・佐藤礼子・小林明子・家根橋伸子・顔幸月 (2006) 「学習者が求める日本語教師の行動特性の構成概念」『日本語教員養成における実践能力の育成と教育実習の理念に関する調査研究』, 94-105
- 文化庁 (2000) 「日本語教育のための教員養成について」『平成12年3月30日 日本語教員の要請に関する調査研究協力会議』
- 文化庁 (2012) 「日本語教員等の養成・研修に関する調査結果について」『平成24年3月30日 日本語教員等の養成・研修に関する調査研究協力会議』